国際日本学研究科

修士学位請求論文　要旨

〔論文題名〕

中国大陸における動漫情報誌の成立と変遷

国際日本学専攻　博士前期課程	
ポップカルチャー　　研究領域	
入学年度	2020 年度
学生番号	4911201007
氏　　名	金雅婕
指導教員	森川嘉一郎
提 出 日	2023 年 1 月　13　日

研究の背景と目的

日本では、1970 年代以降、『アニメージュ』（徳間書店）、『アニメディア』（学習研究社、現発行元は学研プラス）、『月刊ニュータイプ』（角川書店、現発行元は KADOKAWA）をはじめとするアニメ情報誌が多数創刊され、その時々の新作を中心とするアニメ作品の情報発信とともに、読者投稿欄を通じたアニメファンの交流の一角を担い続けてきた。このような、日本のアニメ情報誌に相当する雑誌は 1998 年以降、中国大陸において日本産アニメの人気の高まりとともに、現地出版社によって多数刊行され、「動漫情報誌」と総称されてきた。

本稿は、中国大陸において日本のアニメ、さらにはマンガなど関連文化の情報発信を担ってきた「動漫情報誌」を研究対象とし、雑誌のジャンルとしての成立と変遷を明らかにすることを目的とする。これにより、日本のマンガやアニメの国際的浸透の経緯の一端を浮かび上がらせるとともに、将来的な関連資料のアーカイブ構築にも寄与したい。なお、本研究で対象とした「動漫情報誌」は、中国大陸において発行されてきたものに限り、成立や発展の背景が異なる台湾や香港の雑誌については扱っていない。

産業白書など公的調査にもとづくデータは公開されていないものの、一部の先行研究からは、「動漫情報誌」は 2000 年代から、政府が出版業界への取り締まりを強化した 2013 年までの時期に、中国の漫画出版市場の中で一定の割合を占めたことが窺える。

本稿では、中国における「動漫情報誌」の成立、変遷、雑誌のジャンルとして衰退した要因を明らかにすることを目的に、1998 年から 2017 年の期間を対象に、以下の仮説を立て、これを検証する。

仮説

先行研究や予備的な調査から中国の動漫情報誌に関わる、以下のような内容的特徴や変遷が浮かび上がった。これを仮説とし、検証する。

中国大陸において 1998 年から 2017 年の期間に発行された動漫情報誌のうち、掲載作品のジャンルにおいて総合性の高い、主たる雑誌は、「アニメ・マンガ等の作品情報」、読者か

らの作品評などの投稿である「漫評」、日本の作品の転載などによる「連載マンガ」、の主に3つの内容から構成されていた。

動漫情報誌は、ジャンルとして成立した初期にあたる90年代から2000年代前半の時期には、中国における日本のマンガやアニメのファンにとっての重要な情報源であったため、その内容は「アニメ・マンガ等の作品情報」が3割以上を占めていた。また、政府の規制による制約を受けにくい民営ルートを通じて発行されていたため、日本のマンガ作品の海賊版転載が同じく誌面の大きな割合を占めていた。その後、各誌は個性を出すために作品情報とマンガ連載の割合を減らす一方、漫評の割合を増やし、漫評が雑誌の内容の中心になった。

2010年頃から、中国における日本のマンガやアニメのファンの細分化と並行して対象読者が拡大したため、多くの動漫情報誌が細分化に対応する内容の別冊雑誌を創刊した。さらに、日本のアニメやマンガ作品以外にも、実写ドラマや声優などに関する情報も頻繁に掲載されるようになった。

2015年前後には、中国における出版業界の不景気、および2013年に政府が不正出版の取り締まりを強化したことが主たる要因となり、動漫情報誌の休刊が相次ぎ、雑誌のジャンルとして衰退した。

この衰退にいたるまでの期間、中国おける動漫情報誌は、中国における日本のマンガやアニメのファンの中でも傾倒ぶりの強い、いわゆる「コア」な人々の人気を集め、さらに読者としての彼らにコミュニケーションの場を提供したことで、「コア」なファンの数の増大に与った。

研究方法

上記の仮説を検証するため、本研究は以下の調査を行った。

1. 定量分析

先行研究によると、2000年前後から2010年代前半までの中国大陸において、約80誌の動漫情報誌が発行されていた。その中から代表性の高いものを調査対象として選定するに

あたり、中国大陸では産業白書など公的調査に基づいた発行部数などのデータが公開されていないため、編集者に意見を求めたり、ネット上の評価情報を参照したりした。8 誌を調査対象として選定したあと、バックナンバーを網羅的に入手した上で、各雑誌の掲載内容の推移を定量的に分析した。

2. インタビュー調査

とりわけ代表性が高い動漫情報誌の編集者に取材調査を行い、創刊の経緯や内容の変化、休刊の理由、投稿の仕組みなどを聞き取った。

研究の経過と結果

調査の結果、仮説に関わる以下の証言や統計結果を得た。

中国における動漫情報誌は、2000 年頃にマンガ雑誌やゲーム雑誌など日本のコンテンツに関わる雑誌から派生して創刊され、当時の中国における日本のアニメ・マンガファンの人々の、作品についての話題で交流したいというニーズに応えて発展してきた。2010 年代に入ってからは、中国における日本のアニメ・マンガファンの細分化が進むとともに、マンガ・アニメから派生したさまざまな他のメディアの情報を中心とした専門雑誌が多数創刊された。

代表性の高い主たる動漫情報誌の内容は、主に、主に、「アニメ・マンガ等の作品情報」と、読者からの作品評などの投稿である「漫評」から構成されていた。他方、海賊版の日本マンガ連載を掲載する雑誌は比較的少なく、また掲載していた雑誌においても、1 誌を除き、その割合が雑誌の内容全体の 45%を超えることはなかった。なお、2010 年に入って現れた内容が細分化された雑誌の一部には、二次創作小説やオリジナル小説が掲載されるようになった。

中国大陸における動漫情報誌は、政府による内容規制を受ける正規ルートとは異なる、民営による「第２ルート」とも呼ばれる小売りチェーンを通じ、学校等に隣接して出店される「書報亭」と呼ばれる店にて販売されていた。そのため、このジャンルの雑誌の中心的な読者層は、中高生であった。また、小売りチェーンを通じて流通する雑誌にとっては、全国規

模で卸売市場を開拓することが売り上げの要となり、卸売りの販路の開拓が進まずに創刊から数ヶ月で廃刊にいたった事例も少なくなかった。それが、動漫情報誌において創刊・廃刊が頻繁に発生していた要因である。一方、『動感新勢力』、『動漫販』、『動漫前線』など、各都市図書の小売りチェーンが販売した動漫情報誌は、毎号 20～30 万部程度の販売を達成しており、2010 年代前半に衰退にいたるまでは中国におけるマンガ関連出版市場で一定の規模を占めていた。

2015 年頃、出版規制の違反、版権問題、出版市場の不況などが重なり、中国大陸における動漫情報誌は、ジャンルとして衰退した。

なお、編集者の証言からは、動漫情報誌が、編集者の趣向や嗜好に沿って雑誌の内容が方向付けられるおもむきが強く、その意味で同人誌的な性格が強かったことがうかがわれた。動漫情報誌は、編集者が漫評の質を重視し、漫評ライターを育成したことにより、中国における同人文化の発展にも寄与したと考えられる。

キーワード：中国大陸、動漫、情報誌、日本のアニメ・マンガ、漫評、中国の同人文化